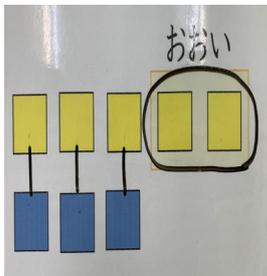
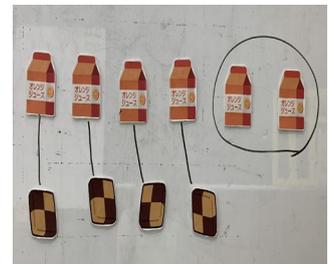


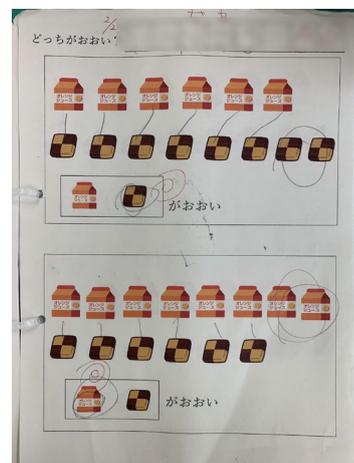
ものともとの対応させることによって、ものの個数を比べ、同等・多少が分かることの指導 ～見て比較できる教材を使った事例～			
学部・教科	小学部・算数科	事例コード	2 2 1 8
学習グループの実態	<ul style="list-style-type: none"> 小学部2学年（2名） 20個程度の目の前のものを指差しながら数えることができ、3個程度であれば数えなくても見ただけでいくつあるかを答えることができる。 対応させて半具体物を配ることができる。 数詞ともとの関係が分かり、使いたいおもちゃの数や登校した児童の人数を数詞で答えようとするすることができる。 		
単元(題材)名	『どっちがおおい、すくない』		
学習指導要領の内容	算数科／小学部2段階 A数と計算 ア 10までの数の数え方や表し方、構成に関わる数学的活動 (ア) ㉞、(イ) ㉞		
単元(題材)の目標	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
	ものともとの対応させることによって、ものの個数を比べ、同等・多少が分かる。【Aア(ア) ㉞】	数詞と数字、ものとの関係に着目し、数の数え方や数の大きさの比べ方、表し方について考え、それらを学習や生活で興味をもって生かすことができる。【Aア(イ) ㉞】	数量に関心をもち、算数で学んだことの楽しさやよさを感じながら興味をもって学ぼうとする。【小学部2段階A目標ウ】
単元(題材)の計画	総時数10時間		
	1 おおいのどっち?・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6時間 2 すくないのどっち?・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4時間		
指導の実際	<ul style="list-style-type: none"> 単元の最初に、皿にお菓子を入れる具体物操作を行い、残ったお菓子や皿を「おおい」と表現することが分かるように一緒に身振りをしたり、教材1のカードを提示したりした。 一対一対応はできるものの、少ないほうを指差して「多い。」と表現することもあった。そのため、「同じ。」と言いながら対応させたり、余ったものを持ったり、丸を付けたりして、「おおい」ものに着目できるようにした(教材2)。 具体物同士を線で結びつけることも有効であったが、書字が苦手な児童には具体物同士の間隔などに配慮が必要であった(教材3)。 「おおい」ものに着目できるようになったことで、ほぼ正しく答えることができるようになった。比べるものが変わっても正しく答えることができた。 		



教材1



教材2



教材3 プリント教材